第１学年６組　音楽科学習指導案

指導者　小 幡 貴 子
場　所　第１音楽室

１　題材名　　言葉のリズムを感じて旋律をつくろう

＜教材名＞　・トモダチ（ケツメイシ）
・金子みすゞ詩「空の色」「大漁」
・金子みすゞ詩による歌曲（中田喜直　作曲・石若雅弥編　作曲）

＜学習指導要領との関わり＞

第１学年

Ａ表現（３）ア　言葉や音階などの特徴を生かし、表現を工夫して旋律をつくること
〔共通事項〕ア　リズム、旋律、構成

２　題材について

（１）　題材観

本題材は、言葉のもつアクセントやリズム、抑揚について理解し、その抑揚に音をつけて旋律をつくる過程へと発展させていく学習である。

今回の学習指導要領改訂において、創作分野の指導事項は、感じ取る対象、思考判断の部分が明確になったとともに、新たに示された〔共通事項〕をかかわらせることにより、指導内容の焦点化や指導と評価の一体化がより一層図られることとなった。このことを踏まえ、本題材では、感じ取る対象を言葉のもつアクセントやリズム、抑揚とし、これを手がかりにして簡単な旋律を創作したり、聴いたりできる能力を育成することをねらいとする。さらに、「考える→試す→考える→…」といった思考・判断を繰り返していく学習過程の充実を図り、主体的に練習したり協力して工夫したりする資質の向上をねらいとする。

言葉のもつアクセントやリズム、抑揚は、普段の生活の中で特に意識されることはなく、自然に表現されているものである。この無意識下にあるものを意識化させることで、身構えることなく、自然なリズムや旋律をつくることができるだろう。言葉とリズムを関連させた創作活動は、中学校音楽における創作学習の第一段階として、また生徒の実態からも適していると考える。授業では導入として、言葉のもつリズムを生かした音楽であるラップ（ヒップホップミュージック）を取り入れ、旋律づくりの手がかりとなる言葉のもつアクセントやリズム、抑揚について、焦点化して意識させていく。生徒たちが普段慣れ親しんでいる音楽を教材にすることにより、興味・関心を持たせながら取り組ませることができるであろう。

次に、詩の中の言葉の抑揚をリズムや音に置きかえ、旋律にしていく授業を展開する。創作活動では、自分なりのイメージをもつことが大切である。本題材では、音や音楽に対するイメージをもたせるために、詩を提示する。イメージをもち、音の並べ方やつなげ方の根拠を自己の中で明らかにしていくことは、明確な意図をもった試行錯誤と成り得るだろう。

本題材における創作過程が、旋律そのもののよさや美しさなどの質的な世界を感じ取りながら、旋律と歌詞とのかかわり、旋律線のもつ方向性など、音楽に対する鋭い理解力を自覚させるものと期待する。

最後に、音楽学習活動の過程では音や音楽を媒体とした人と人とのかかわりが重要であると考えている。本題材でも言語活動を支えとしながら、自分の思いや意図、他者の思いや意図を、音楽を通して感じ、伝える場面を設定していく。

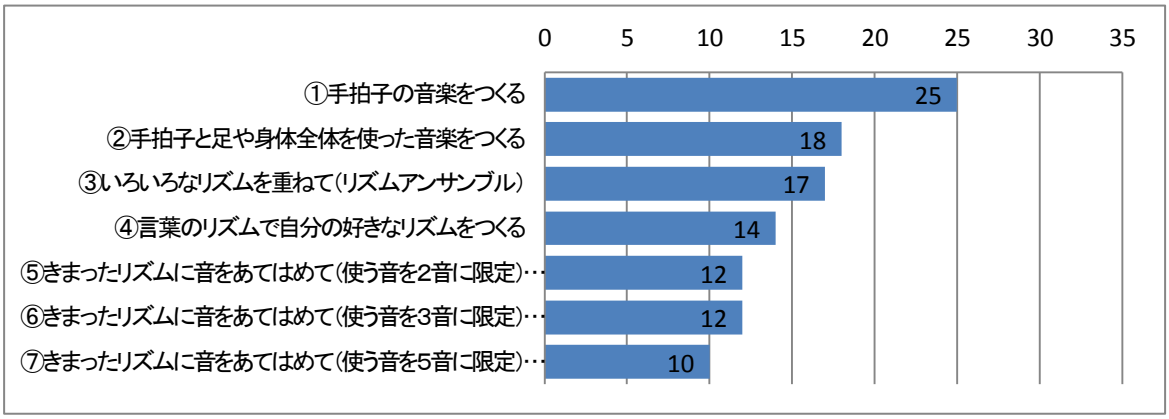
以上のことから、本題材を設定した。

（２）生徒の実態

本学級は男子２０名、女子１７名、計３７名である。音楽活動に対して大変意欲的に取り組む。歌唱活動においても、１年生らしい明るくエネルギッシュな歌声を響かせるなど、自己を開放し、しっかりと表現することができる。事前アンケート（37 名対象）では、「音楽の授業内容で楽しい、または勉強になると思うものは何か」という質問に対して、「歌うこと」が約 84%（31 名）、「楽器の演奏」が約 81%（30 名）、「音楽を聴く」が約 76%（28 名）と、前向きな回答をしている生徒が多くみられる。「作曲」と回答した生徒は約 27%（10 名）であった。

リズム・旋律にをもとにした小学校での創作学習経験についての回答は、**表 1** の通りである。

表 1　リズム・旋律をもとにした音楽づくりの学習経験調査



リズムをもとにした創作（質問項目①～④）について、約 38～68%（14～25 名）の生徒が「経験あり」と回答している。実際の授業においても、リズムカードの提示に対するリズム打ちの反応もよく、リズムに関する学習は比較的定着しているものと考える。「決まったリズムにいくつかの音をあてはめる」（質問項目⑤⑥⑦）旋律創作については、約 27～32%（10～12 名）の生徒が経験している。一方で、「手拍子の音楽づくり」（質問項目①）以外の音楽づくりを、クラスの半数以上が全く経験していないという実態も踏まえなければならない。「今後の音楽の授業でどんなことをやってみたい、またはできるようになりたいか」という質問に対して、「合唱や合奏」と回答した生徒は約 65%（24 名）いるのに対し、「作曲」と回答した生徒は約 27%（10 名）である。小学校での音楽づくりの経験がない、または十分ではないために、創作学習へのイメージがもてないものと推察する。これらのことから、小学校でのリズム創作学習の内容を加味した段階的な手立てを講じることが大切であると考える。

さらに、旋律創作の学習が敬遠される理由として、記譜をさせることの難しさと、音の高低などの感覚が十分に理解できていない生徒の実態が考えられる。本題材では、中学校に入学して初めて行う旋律創作の学習を、だれにでもできる単純な作業を通して楽しく進めたいと考える。そして、旋律を「自らつくった」という達成感と自信を持たせることにより、今後の音楽学習への主体的なかかわりを期待したい。

（３）指導観

創作分野の学習は、難しい楽典の理論を使わずとも簡単に音楽を作ることができる、と実感を持たせることが第一条件であると考える。そこで本題材では、感じ取る対象を「言葉のもつアクセントやリズム、抑揚」とし、これらを手がかりとした旋律を創作する。

抑揚とは、「音声や音楽・文章などの調子を上げたり下げたり、また強めたり弱めたりすること。」[1]で

[1] 『大辞林』

ある。日本語の場合、抑揚は音の強弱よりも高低によるアクセントととらえるが、英語のそれに比べ非常に曖昧で、また個人差もある。さらに、文章に対する抑揚（イントネーション）は、たいてい Mi~Ra のわずか４度音程のところを行ったり来たりするのが特徴である。こうした日本語の特性を十分にとらえさせながら、身構えることなく旋律づくりに取り組めるようにしたいと考える。

授業ではまず、リズムによる音楽ゲームを通して音楽づくりを体験し、音への意識をもたせていく。そこで感じ取ったことを生かし、言葉とリズムとの関係を理解するためにラップミュージックを創作する。さらに、リズムを感じ取ることのできる詩の言葉から、音の高低を感じながら音をあてはめ、旋律をつくっていく。このようなスモールステップを踏むことで、無理なく旋律づくりに取り組ませることができると考える。

また、中学校における創作活動が、生徒たちの生活においてもっとも身近な音楽につながっているのだという実感をもたせたいと考える。そこで、ポピュラー音楽、とりわけラップミュージックや J-POP の手法を取り入れていく。ラップミュージックとは歌唱法のひとつで、小節の終わりなどで韻を踏みながら、あまりメロディーをつけずにリズミカルに喋るように歌う方法のことである。口語に近い抑揚をつけて発声することから、言葉のもつリズム性と音楽が結びついた面白さを味わうことができると考える。また、使う音についても、日本語の特性を踏まえて Mi・So・Ra の３音に限定し、口語に近い自然な歌唱曲をつくることから始める。しかしながら、生徒たちが接している音楽の多くは、多様な調性と広範囲な音域をもつものがほとんどである。そこで、徐々に音域を広げ、最終的にはハ長調音階（Do～Do）による旋律創作へと発展させていきたい。以上の内容を、生徒が聴いたことのある曲を例に出して、その曲の旋律が、言葉のアクセントやリズムに合う旋律となっていることに気づかせ、特徴をつかませていく。

最後に、創作活動では表現したいイメージを、共通事項を支えとして具現化するという活動目標をもつことで、明確な意図をもった試行錯誤が可能となる。このことが、主体的に練習したり協力して工夫したりする資質の向上につながるものと考える。リズムや旋律の知覚・感受からイメージをもつこと、イメージを形成させるための歌詞をじっくりと味わわせること、以上２点を重点に置きながら進めたい。具体的には、創作過程において、実際に手拍子を打つ、リコーダーを吹く、キーボードを弾くなど、必ず音を出して作るように助言する。同時に、歌詞がもつイメージをワークシートに記述するなど、言葉で表現をさせる。歌詞については、リズムを感じさせる言葉として、金子みすゞの詩を紹介する。金子みすゞの詩は生徒たちにもなじみがあり、何よりもイメージを豊かにふくらませることができる教材であると考える。音と詩の間を行き来し、イメージを膨らませながら旋律づくりに取り組ませたい。

３　題材の目標

リズムを知覚し、その働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、言葉のもつアクセントやリズム、抑揚を生かした旋律をつくることができる。

４　題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
言葉のもつアクセントやリズム、抑揚の特徴に関心をもち、それらを生かして短い旋律をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。	リズム・旋律を知覚し、その働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、言葉のもつアクセントやリズム、抑揚を生かしたリズムの組み合わせを工夫し、どのように旋律をつくるかについて思いや意図をもっている。	言葉のもつアクセントやリズム、抑揚を生かした音楽表現をするために必要な、音の組み合わせ方、記譜の仕方を身に付けて、旋律をつくっている。

※５　研究の視点について

本題材では、≪視点１≫「表現と鑑賞を関連させた題材構成の開発」に焦点をあて、創作と鑑賞を関連させた授業のあり方について追究する。

共通の指導内容となる「音楽を形づくっている要素」をリズムと旋律に焦点化し、これらを手がかりとした創作表現をする。これにより、歌詞と旋律とのかかわりについての理解が深まり、旋律そのもののよさや美しさなどの質的な世界を感じ取ることができるようになると考える。その検証として、旋律に焦点をあてた同詩による比較鑑賞の授業を構想し、子どもの変容をとらえていく。

６　題材の指導計画（３時間計画）

次	時	○学習内容　・主な学習活動　☆〔共通事項〕	【評価規準】　□評価方法
１次	第１時	**《ねらい》言葉のもつリズムと、音符とのかかわりを知覚・感受し、２小節のリズム旋律をつくる。**	
		○常時活動 ○言葉のもつリズムを知覚・感受する。 ・「トモダチ」の歌詞（「最初～幸あれ」の一節）を音読する。 ・言葉にはリズムがあることを知る。 ・ラップ曲（トモダチ<ケツメイシ>）を鑑賞し、言葉とリズムが組み合わさった音楽表現の面白さを感じ取る。 ○言葉の自然なリズムを感じ、音符とのかかわりについての学習の見通しをもつ。 ・８種のリズムパターンに合った言葉を選び、言葉のもつリズムと音符とのかかわりを知覚・感受する。 ・８種のリズムパターンに言葉をのせて演奏する。 ○提示したリズムパターンに合う言葉を、自分のイメージとかかわらせながら考え、２小節（４分の４拍子）のリズム旋律をつくる。 ・４つの言葉をつなげて２小節のリズム旋律を創る。 ○作品を演奏し、聴き合う。 ・ペアを組み、言葉をつけて互いの作品を演奏する。 ・友達のリズムと比較し、共通点や異なる点等について発表し合う。 **☆リズム**	【関】 言葉のもつアクセントやリズムの特徴に関心をもち、リズム譜に表すことに主体的に取り組もうとしている。 □活動の様子の観察 □振り返りカードの記述 【技】 言葉のもつアクセントやリズムを生かした音の組み合わせ方でリズム旋律をつくり、楽譜に書いている。 □ワークシート
	第２時（本時）	**《ねらい》言葉の抑揚（高低のアクセント）を生かした２小節の旋律をつくる。**	
		○常時活動 ○言葉のもつアクセントやリズムと、音符とのかかわりを知覚・感受する。 ・各自がつくったラップを演奏し、前時の復習をする。 ・「Let it go（日本語版）」の歌詞の一部を音読する。 ・言葉には抑揚（高低のアクセント）があることを知る。 ・「Let it go（日本語版）」を鑑賞し、言葉とリズムが組み合わさった音楽表現の面白さを感じ取る。 ○簡単な言葉（単語）について、抑揚を生かした旋律の作り方を知る。	

		・前時で学習した８種のリズムパターンにあてはめた言葉の抑揚を線で表す。 ・抑揚の線にそって、Mi・So・Ra の３音をあてはめていく。 ・五線譜に記入する。 ○言葉のリズムと抑揚を生かして２小節の旋律をつくる。 ・言葉のリズムと抑揚を意識して前時に作成した各自の詩を朗読する。 ・言葉の抑揚を線で表す。 ・抑揚の線にそって、３音（Mi・So・Ra）または５音（Do～So）の音をあてはめる。 ・全体の流れがスムーズになるのはどの音の並べ方か、考える。 ・五線譜に記入する。 ○つくった旋律を発表し合い、よさを共有する。 ○学習の振り返りをする。 ・旋律をつくるときに気を付けたことや工夫したところを記入する。 ・友達の作品を聴いて、言葉のイメージが表現されているかについて記入する。 **☆リズム、旋律**	【創】 音の並べ方をいろいろと試しながら、言葉の抑揚を生かして、どのように旋律をつくりたいのかについて思いや意図を記述している。 □ワークシート 【技】 言葉の抑揚を生かした旋律をつくり、楽譜に書いている。　□作品
２次	**第３時**	**≪ねらい≫言葉のリズムと抑揚、ハ長調による旋律、構成などの特徴を感じ取りながら、詩のイメージにあった旋律をつくる。**	
		○言葉のリズムと抑揚を生かして４小節の旋律をつくる。 ・金子みすゞの詩「大漁」「空の色」の朗読を聴き、言葉のリズムと抑揚を知覚・感受する。 ・詩の中から旋律をつくりたいフレーズを選ぶ。 ・手拍子で言葉のリズムを演奏し、ワークシートに「タン」「タタ」などの言葉を記入する。 ・記入したものを手がかりにして、リズムパターンを選ぶ。 ・抑揚の線にそって、ハ長調音階（Do～Do）の音をあてはめ、全体の流れがスムーズになるのはどの音の並べ方か、考える。 ・五線譜に記入する。 ○つくった旋律を発表し合い、よさを共有する。 ○旋律の特徴から、作曲者の思いや意図を感じ取って鑑賞する。 ・旋律を聴いて、詩のどの部分を使ったのかを考える。 ・金子みすゞの歌曲を比較鑑賞する。 ○学習の振り返りをする。 ・旋律をつくるときに気を付けたことや工夫したところを記入する。 ・友達の作品を聴いて、言葉のイメージが表現されているかについて記入する。 **☆リズム、旋律**	【創】 音の並べ方をいろいろと試しながら、言葉の抑揚を生かして、どのように旋律をつくりたいのかについて思いや意図を記述している。 □ワークシート 【技】 言葉の抑揚を生かした旋律をつくり、楽譜に書いている。 □作品

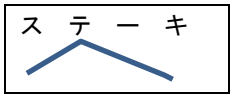
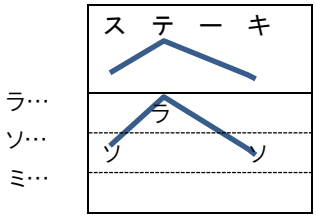
※11 月県音研千葉市大会では、＜視点 1＞の提案で検討中である。その場合、本題材の指導計画に第３次として次のような鑑賞の学習を加わる予定である。

３次　第４時　≪ねらい≫旋律の特徴から、作曲者の表現の意図を感じ取って鑑賞する。
○シューベルト作曲による「魔王」とレーウェ作曲による「魔王」の比較聴取をする。 特に同じ歌詞（魔王が子をさらう場面や、語り手が「死んでいた」と語る場面）の旋律やリズムの特徴が対照的な面をクローズアップし、感じ取り方の違いやどちらが自分にとってよいかなどを考えさせることを活動の中心に置き、題材の最後では、全曲を通しての批評文を書いてそれを交流する活動を行う。

７　本時の学習（２／３）

（１）本時の目標　　言葉の抑揚（高低のアクセント）を生かした２小節の旋律をつくる。

（２）展開

時配	○学習内容　・学習活動　〔共通事項〕	○教師の働きかけ　◆評価規準　【評価方法】
３	○常時活動 ・フラッシュカード（音符・休符・リズム）	
７	○言葉のもつアクセントやリズムと、音符とのかかわりを知覚・感受する。 ・「Let it go（日本語版）」の歌詞の一部を音読する。 ・言葉には抑揚（高低のアクセント）があることを知る。 ・「Let it go（日本語版）」を鑑賞し、言葉とリズムが組み合わさった音楽表現の面白さを感じ取る。 ○本時の学習内容を知る。 ・学習課題を提示する。	
	言葉のリズムや抑揚を生かして旋律をつくろう。	
	・言葉のもつ抑揚を手がかりにして、簡単な旋律をつくることを知る。	○言葉の抑揚（高低）を生かした旋律をつくることを伝える。
１０	○簡単な言葉（単語）について、抑揚を生かした旋律の作り方を知る。 ・前時で学習した８種のリズムパターンにあてはめた言葉（「コーヒー」「ラーメン」「サイダー」等）の抑揚を線で表す。 ・抑揚の線にそって、Mi・So・Ra の３音をあてはめていく。 ・リズムと音を組み合わせてソプラノリコーダーで演奏する。	○抑揚線の書き方を例示する。 （例）  ○音のあてはめ方を例示する。 ○初歩段階なので、口語に近い抑揚（Mi・So・Ra）でつくることを伝える。 
２０	○言葉のリズムと抑揚を生かして２小節の旋律をつくる。 ・言葉のリズムと抑揚を意識して前時に作成した各自の詩を朗読する。 ・言葉の抑揚を線で表す。	

	・抑揚の線にそって、３音（Mi・So・Ra）または５音（Do～So）の音をあてはめる。 ・全体の流れがスムーズになるのはどの音の並べ方か、考える。 ・五線譜に記入する。	○使用する音を５音（Do～So）とする。 ○楽器を用いて、音の組み合わせ方や並べ方を様々に試しながら考えるよう助言する。 ※使用する楽器 ・ソプラノリコーダー　・オルガン ・ピアノ　・キーボード　・鍵盤打楽器 ○机間巡視し、教師が演奏するなどして旋律の流れを確認させる。 ○記譜が困難な生徒は、カタカナで階名のみ記入でもよいことを助言する。 ◆技－① 言葉の抑揚を生かした旋律をつくり、楽譜に書いている。　【作品】
１０	○つくった旋律を発表し合い、よさを共有する。	・創作時に使用した楽器の音を出しながら演奏してもよいことを伝える。 ・全体で楽譜を共有するために、楽譜をテレビ画面に映し出す。
１０	○学習の振り返りをする。 ・旋律をつくるときに気を付けたことや工夫したところを記入する。 ・友達の作品を聴いて、言葉のイメージが表現されているかについて記入する。 ☆リズム、旋律	◆創-① 音の並べ方をいろいろと試しながら、言葉の抑揚を生かして、どのように旋律をつくりたいのかについて思いや意図を記述している。 【ワークシート】

市教研音楽部会
学習指導案

研究主題

「伝えよう　私の音楽　私の心　つなげよう未来に」

≪研究の視点≫

視点１　表現と鑑賞を関連させた題材構成の開発

視点２　思いや意図をもって表現したり、聴いたりする力の育成のための手法

日　時　　平成２６年６月１７日（火）

場　所　　千葉市立みつわ台中学校

授　業　　第１音楽室（３階）１４：００～１４：５０

協議会　　被服室（２階）　　１５：００～１６：３０

授業者　　小幡　貴子

展開学級　　１年６組

指導助言　　小長井博子先生（佐倉市立白銀小学校　校長）

神作　稔先生（千葉市立都賀中学校　校長）